

教員養成課程における毛筆書写実技の指導 —楷書の技能を向上させる基本ポイント—

富山敦史

要旨：本稿は、実技指導が中心となる「書道・書写A」の授業において、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として設定された限られた対面実技指導の中で、小中学校の書写授業を展開するための基本的な知識及び技能を獲得させるために学生諸君と試行錯誤しながら進めた授業の記録である。今回の授業では、新「学習指導要領」（平成 29 年告示）の内容と楷書と楷書に調和する平仮名、片仮名の実技を取り上げた。実践を通して、点画の練習において「筆の持ち方」「筆を垂直に立てる」「穂先の通り道」「筆圧」「書く速度」をポイントとして意識し集中して練習を進めることで、学生は楷書の基本的な書き方や指導のポイントを身に付けることができた。またオンライン授業時における実技指導の動画は、多様な角度から撮影し、書き方（入筆の角度やタイミングや穂先の通る位置、終筆の方法など）が明確に可視できるものが有効であるとの示唆を得た。

キーワード：知識及び技能、毛筆書写、穂先の位置、筆圧、書く速度

1. はじめに

平成 29 年 3 月告示の新学習指導要領では、これまでよりいっそう「知識及び技能」に重点が置かれた。内容の文言には「(児童生徒が)身に付けることができるように指導する」とともにその具体的な項目も明示されるようになった。これからの小・中学校における書写指導は、書字に関わる知識のみならず、それらを使い、実際に生活の中で書くことができる技能を児童生徒に身に付けさせることを目標にしているため、必然的に教員にも確実に指導できるための力量形成がもたらされよう。

拙稿「どうすれば毛筆で上手く文字が書けるのか」(富山 2017) *1では、学生に「書写」の授業を行うための具体的な指導の視点や「書写」授業に取り組む自信を獲得させる方策を探るため、中学 1 年生と大学 2 年生を対象にしたアンケート調査(自由記述)から「毛筆で上手く字を書くためのポイント」として、1「姿勢」、2「筆の持ち方」、3「筆遣い(速さも含む)」、4「形・バランス」、5「ポイントの明確化」、6「メタ認知」、7「環境設定」、8「筆圧」の 8 つのポイントを抽出した。これらは、小・中学校学習指導要領(平成 29 年告示)で掲げられている文言とも密接に関わっていた。

本稿では、これらのポイントを念頭に、短期間で小中学校の書写授業の構築に資する「知識及び技能」の習得を目指した授業実践例を提案する。

2. 授業計画

2020 年前期は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、全 15 回の授業のうち、7 回がオンライン授業を余儀なくされた。このオンライン授業は、学生の IT 環境を考慮し、大学のポータルサイトを用いた資料配付型(ポータルサイトに講義資料と課題をアッ

教員養成課程における毛筆書写実技の指導
一楷書の技能を向上させる基本ポイント

ブロードし、課題をポータルサイトに提出させるもの)で実施した。実技指導が中心となる「書道・書写A」の授業において、どの程度授業の目標が達成されるか、授業者、受講者双方ともかなりの不安を抱えつつの実践であった。[https://portal.sz.tokoha-u.ac.jp/sz/slbssbdr.do?value\(risyunen\)=2020&value\(semekikn\)=1&value\(kougicd\)=111E1921&value\(crclumcd\)=1914111000](https://portal.sz.tokoha-u.ac.jp/sz/slbssbdr.do?value(risyunen)=2020&value(semekikn)=1&value(kougicd)=111E1921&value(crclumcd)=1914111000) (シラバス参照)

(1)受講者ならびに使用教科書・参考教材

◆対象者 本学教育学部 (中学校国語科教員免許取得希望者) 2年生 40名、3年生 5名

◆教科書

①「国語科書写の理論と実践!」、全国大学書写書道教育学会編、萱原書房、2020

②「明解書写教育 増補新訂版」、全国大学書写書道教育学会編、萱原書房、2016

◆参考教材

①「書写」教科書 (平成26年検定済小学校6社、平成27年検定済中学校5社)

②「10日で「美文字」が書ける本+DVD」、青山浩之、講談社、2013

③「DVD 漢字テストのふしぎ」、長野県梓川高等学校放送部制作、2007

④「DVD 書写筆使いの基礎4つの視点を意識した上達術」、福井県教育委員会、2017

⑤「常用漢字表 (平成22年内閣告示第2号)」、文化庁、2010

https://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/sisaku/joho/joho/kijun/naikaku/pdf/joyokanjihyo_20101130.pdf

⑥「参考資料 学校教育における漢字指導の在り方について 参議院文教科学委員会、2016年3月10日(木)」、平成28年3月14日教育課程部会国語ワーキンググループ参考資料

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/068/siryo/_icsFile/afieldfile/2016/03/31/1369048_05_2.pdf

⑦「知っておきたい!手書きの常識」、平形精逸、東京書籍、2020

⑧「点画の書き方(楷書)」(自主制作動画)

(2)授業計画 (全15回 オンライン授業7回<①~⑦>、対面授業8回<⑧~⑮>)

第01回: オンライン ◆教科書①P26「1授業づくりの要点」を読み、これからの「書写の学び」をどのようにすすめていくのかを教員・児童生徒の立場で考える。

第02回: オンライン ◆教科書①P7とP84-90「新学習指導要領国語〔書写〕小学校・中学校」を読み、要点を把握するとともに、小学校と中学校の「書写に関する指導事項」の系統性を理解する。

第03回: オンライン 小学校と中学校の「書写に関する指導事項」の系統性を図表にまとめる。「指導上の留意点と配慮事項」について理解する。

第04回: オンライン これまで「新学習指導要領」を学んで①「あなたが分かったこと」②「あなたが教員として身に付けるべき技能」を具体的に整理しまとめる。

第05回: オンライン ◆教科書①P26-29「筆記具等(用具・用材)と姿勢・執筆法」を読み、初めての毛筆書写の時間の準備物を知らせる「お知らせプリント」を作成する。

第06回: オンライン ◆教科書①P38 下段の表「各基本点画の始筆・送筆・終筆」を穂先の通る位置に注目し練習(半紙5枚程度)後、清書1枚を完成し写メで撮

教員養成課程における毛筆書写実技の指導
一楷書の技能を向上させる基本ポイント一

影しメールで提出。

- 第 07 回：オンライン 点画の基礎（筆先の通り道）
第 08 回：対面実技 筆の持ち方・姿勢、漢字「楷書」の点画（横画、縦画）
第 09 回：対面実技 点画の練習（筆の持ち方、垂直、穂先の通り道、速度：ゆっくり）
第 10 回：対面実技 始筆・送筆・終筆（筆先の通り道）「左右」「山寺」の練習と清書
「左右」（点画練習の成果を試す）「山寺」敷き写し（原寸大手本）
第 11 回：対面実技 筆圧「友人」「日光」の練習と清書 「友人」（払いの詰め）「日光」
（籠字、曲がりとり）
第 12 回：対面実技 「いろはうた」、「の」の書き方ポイントと模擬授業
第 13 回：対面実技 「いろなうた」の練習と清書、
第 14 回：対面実技 「硬筆 平仮名、片仮名の練習 DVD 視聴」、「指導法」「評価の方法」
第 15 回：対面実技 「漢字仮名交じり六文字」（「美しい山の緑」）＋「IT 時代の漢字指
導・漢字テストのあり方」

3. 授業の実際と指導のポイント

今回の授業では、新「学習指導要領」（平成 29 年告示）の内容と「楷書」と楷書に調和する「平仮名」「片仮名」の実技を取り上げた。

(1) 学習指導要領（平成 29 年告示）について

ここでは、以下の事項について、講義と演習を行った。講義内容や課題に関する疑問や質問については、その都度メールによる応答を行うとともに次時の講義で紹介をした。

- ・「学習指導要領」改定のポイント
- ・小学校・中学校「学習指導要領」（国語科書写）の内容、目標、指導事項
- ・小中の「指導事項」の系統性（「学習指導要領」付録の系統表の活用）
- ・指導上の留意点と配慮事項の確認

ここでは、多様な児童生徒のニーズに柔軟に対応できる支援方法（読み書き障害、外国にルーツを持つ児童生徒等）を準備し、学びに向かう学習環境を提供することの重要性について確認した。

(2) 筆記具と姿勢・執筆について

- ・筆記具（用具・用材）と姿勢・執筆◆教科書①P26-29

ここでは、教科書①の当該部分を参照しつつ、必要な筆記具と書くときの姿勢の確認を行った。筆記具の持ち方では、鉛筆の持ち方に不安を抱える学生が多くいた。書籍の写真のみでは実際の様子がうまく掴めないこと、自分の持ち方が客観的に把握できないことなどの問題点が挙げられた。毛筆の持ち方についても、「指のかけ方」や「腕の構え方」をはじめ、鉛筆同様に戸惑いがみられた。文章と写真のみで持ち方を伝えることの限界が生じた。また、質疑応答の中で、小中学校で十分時間を設定し、鉛筆や筆の持ち方を指導された経験を持つ学生は少数であった。筆記具の持ち方は、書記活動の根幹となるので、時間をとって身に付けさせることの必要性を確認した。

(3) 実技指導（オンライン指導と対面指導）

◎オンライン授業

- ・漢字「点画の練習」◆教科書②P78-79「主な点画と筆使い」

教員養成課程における毛筆書写実技の指導
一楷書の技能を向上させる基本ポイント一

ここでは、教科書の当該部分を参照しながら、各自で実際に毛筆で「主な点画と筆使い」の練習を課題とし、次の点に着目して練習するように指示した。

- 「筆の持ち方」 →単鈎法または双鈎法で持つ。
→半紙に対して垂直に筆を立てて構える。
- 「穂先について」 →穂先を尖らせる（ぴんぴんにする）。
→斜め 45 度で始筆に入筆、送筆は平行移動、半紙に対して垂直に筆を立てたまま終筆に至る、終筆は押さえ直して、穂先が最後に半紙を離れる瞬間を見る。
→常に穂先の通る位置を確認すること。

オンライン授業においては、文章と図による指導となった。以下「横筆」の指導例を示す。

ア 始筆の基本

筆の穂先をぴんぴんにして、半紙に対して垂直に立てる。穂先から半紙に約 45 度（左上方）の角度で筆圧を加えて押さえ、一旦とめる。このとき穂先は「上」を向いている。

イ 送筆の基本

一旦押さええて止まった位置から穂先の向きが「上」を向いたまま、横に一定の筆圧でスライドさせます。

※スライドさせるときに、穂先が線を中心の方に行ったりしてはいけません。

ウ 終筆の基本

送筆の終わりは止まって、穂先から順に筆圧を強く加えて、押さえます。そして、ゆっくりと半紙に対して垂直に筆を立てて、ゆっくりと半紙から離します。

※このとき最後に、穂先を半紙から離すことがポイントです。

この後、「主な点画と筆使い」の実技課題として、①「横画」②「縦画（止め・払い・はね）」③「左払い（払い）」④「右上払い（払い）」⑤「折れ（止め）」の 5 つを半紙に清書し、写真撮影したものをメール添付で送信提出させることとした。なお、提出は実際の授業時間帯内とした。

以上、オンライン授業について、学生の「振り返り」から抄出する。

- ・学習指導要領に関わる事柄に関しては、講義時間にかかわらず、じっくりと時間をかけて、講義資料や課題に取り組むことができるので、対面授業よりも理解が進んだ。
- ・実技ばかりに囚われ、手本通りうまく書こうとすることばかり考えていたが、「書写」が国語科に位置づけられ、その指導事項の具体を知ることによって単に手本通り書かせることが目的ではないことに気づくことができた。
- ・「知識及び技能」とあり、書くため教えるための知識は身に付いたと思うが、書く技能を子どもたちに身に付けさせることができる自分自身の技能のなさを痛感した。
- ・はやり書面や写真だけの説明では理解が進まない。実際に手をとって、実例をこの目で確認して技能を身に付ける必要がある。対面授業の再開が待ち望まれる。
- ・実技の注意点はだいたい理解できたが、実際に書くときの些細なコツ（実際にはこれが重要なコツかもしれない）は、対面指導を受けないと気づくことができないかもしれない。
- ・穂先の通る位置を指導されたが、具体的にどのように書けばいいのか分からなかった。特に「縦筆」や「払い」、「曲がり」は難しく、穂先が中に入ってしまう。

・書く速さは「ゆっくり書く」「最後穂先が半紙を離れるところを見極める」とあったが、どれだけの「ゆっくりさ」が分からなかった。「見極める」だけの余裕がなく、ただ書くだけに終始してしまった。

◎対面授業（対面指導）

対面授業が再開され、対面指導は8回実施することができた。この限られた8時間の中で、児童生徒を指導できるための技能と知見を見につけさせるために指導のポイントを絞り、以下のような実践を行った。

I 漢字「点画の練習」

○筆の持ち方

・筆の持ち方（単鈎法・双鈎法）の実演を行う。また、筆を持つ位置が筆の可動域と密接に関わっているため、実際に試し書きしながら持つ位置を確認していく。直線のみならず、円を描く、渦巻きを書くなどを行った。小筆の腕の構え方（懸腕法・提腕法・枕腕法）についても、実際に試し書きを行った。このような詳細な指導は小中学校ではほとんど実施されなかったことが浮かび上がってきた。書くことの基本となる筆記具の持ち方指導が技能の習得の度合いを左右するので、今後教育現場での十分な指導時間の確保が必要である。

○姿勢

・筆の持ち方が執筆姿勢に深く関わってくるので、それに応じた姿勢を実演しながら、適切な執筆姿勢を確認した。

○漢字「楷書」の点画練習（横画、縦画）の徹底

・点画の練習（筆の持ち方と持つ場所、垂直、穂先の通りの見極め、書く速度は可能な限りゆっくりと運筆する）

・「点画の書き方（楷書）」（自主制作動画）を見つつ、①「横画」②「縦画（止め・払い・はね）」③「折れ」④「左払い」⑤「右払い」⑥「右上払い」⑦「点」⑧「そり（戈法）」⑨「曲がり（浮鷺）」⑩複合画について各自練習を行う。＋巡回個人指導。

○始筆・送筆・終筆（「左右」「山寺」の練習、清書）

・穂先の通りを常にモニタリングしながら、運筆する。

・「左右」で点画練習の成果を試す（バランスは考慮しない）。「山寺」では敷き写し（原寸大手本）をして、上下の文字のバランスを整える。

○筆圧のかけ方の練習（「友人」「日光」「文武」の練習、清書）

・「友人」で「左右払い」の話をを行う。「日光」で籠字（5枚）をして「折れ」「曲がり」「点」「そり」の筆使い（穂先の通り）を把握する。籠字を上からなぞり書写する。

・時間があれば「文武」も籠字にする（「そり」の把握）。

★筆圧 文字（点画）の太さ、細さの違いは「筆圧」のかけ方の強弱によることを意識する。筆の毛の弾力（バネ）を実感させる。三種類の「点」の練習から、筆を垂直にして押さえる（穂先から）、上にあげる（穂先は最後まで残す）ことで、筆圧を感じ取る。

II 平仮名「点画の練習」

平仮名のポイントは「筆圧」のかけ方にある。漢字の線との違いは、入筆の角度は浅くなり、筆圧も弱めになる、丸みをもっていること、筆脈が現れることである。

・◆教科書②P71「イ 用例別に見た楷書に調和する平仮名の線」を用い、筆圧のかけ方を意識しつつ（筆のバネを感じつつ）、穂先の通り道を見極めさせる。その際運筆は可

能な限りゆっくりと行わせる。書いた線が平仮名のどの部分に相当するのか、他の線との繋がり（筆脈）も意識して文字全体を念頭におきながら書くように助言した。

- ・◆教科書①P33「(3)用例別に見た楷書に調和する平仮名の点画と筆使い」を用い、穂先の通り道（赤線）を意識した練習を行う。また、画の連続から生まれる筆脈（終筆と始筆の繋がり）にも心配りする。
- ・どうすれば上手に「の」が書けるか（「の」の書き方ポイント）を考える。
→「筆圧」と「穂先の通る位置」の確認→ポイント交流→模擬授業の実施→意見交流
- ・◆参考教材①「ステップ3 仮名の筆使いを確かめよう」（「中学書写一・二・三年生」、P14-15、光村図書、）を用い、「いろはうた」の練習と清書を「いろなうた」の字源の漢字を念頭において書く。平仮名を連続して書く練習をすることで、平仮名独特の線の特徴を掴むことができる。

III 片仮名（点画は、漢字に準拠）

片仮名は漢字（楷書）の部分からできたものが多いので、筆使いは楷書に準じる。漢字より点画の数が少ないので、点画の方向や位置を的確に掴むことが大事である。「ソ」と「ン」、「シ」と「ツ」、「ヲ」などに注意させる。

IV 文字のバランスと調和

楷書や平仮名・片仮名の基本点画の書き方の次に、半紙の中に文字をバランスよく、調和のとれた形で書くことが求められる。一字一字は点画の基本書き方を踏まえて書くことができる技能が身に付いてきたが、実際に手本のように文字のバランスと調和をとるにはどうすればよいのか。ここでは、以下に示す段階に従って練習を進めた。

・「敷き写し」

第一段階は、手本を半紙大に大きさにコピーしたもの（コピー手本、以下このように記す）の上に半紙をおいてテープ等で固定し、その上から毛筆でなぞる（「敷き写し」）。勿論塗り絵ではないので、なぞる際にもこれまで学んだ「点画の基本の書き方」に即して書く。これを1回ごとにコピー手本を換えて複数回（5回程度は必要）、練習を行う。その後「敷き写し」を止めて、そのまま半紙に書写してみると、文字のバランスは、ある程度とれるようになる。手本の文字は、2字から4字、6字へと文字数を増やしてみると、必然的に文字の大きさが小さくなり、筆圧のかけ方を調節しなければかきことができないので、筆圧のコントロールの練習にも効果的である。今回は「左右」で実施。

・「籠字」

第二段階は、コピー手本の上に半紙をおいて、鉛筆を使って「籠字」をとることを行う。「籠字」は5回程度行い、実際に毛筆でなぞる前に、指で点画をなぞり感覚を掴んでから毛筆でなぞる。その際「籠字」の枠に収めて字を書くことを意識するあまりに「塗り絵」のようになるのではなく、少々はみ出しても「点画の基本の書き方」を意識して書くことがポイントである。今回は「山寺」「日光」で実施。「籠字」を書くことで「点画の接し方」を意識することができ、始筆の「入筆」の加減や終筆の按配に気づくことができる。

・「目印つけ」（半紙折り、鉛筆や爪）

第三段階は、コピー手本を折り、中心線や上下線、左右線に対してどのように文字が配置されているのかを、コピー手本と同様に折った半紙に、鉛筆や爪で目印をつけてから、コピー手本を見て書くことを行う。「敷き写し」や「籠字」のように文字の点画をすべて

なぞるのではなく、始筆や終筆の位置や点画の間隔や高さなどに目印をつけることで、空間的な位置関係を認識することに繋がる。特に余白の働きに気づかせることがポイントである。必要に応じて「骨書き」も活用した。今回は「日光」以降の手本練習の際に積極的に応用することにした。

・「手本」(拡大・原寸大・縮小)

第四段階は、手本の大きさに関わらず、文字のバランスと調和をとるために、これまで学んだ方法を援用する。これまでに使用した手本は、半紙の原寸大に拡大した手本であったが、書写の教科書掲載の手本の多くは縮小されている。縮小された手本に折り目を入れたり、線を引いたりして、点画の位置などを確認し、それを同様に折るなどした半紙に爪などで目印をつける。また必要に応じて、「籠字」「骨書き」などを施す。こうして、原寸大の手本をそのまま「敷き写し」することから、手本の大きさに関わらず、手本の文字の点画の特徴やバランスを捉えながら、文字を認識できるようになっていく。

・「解字」(文字骨格の理論・漢字をうまく書くコツ)

第五段階は、「文字の組み立て方」を知ることで、文字の構成の特徴を知ることである。漢字は、いくつかの単体文字が組み合わされて成立している(複合文字)。組み合わせられるときの配置のバランス(幅や高さ)を知ることで、共通する部分をもつ漢字全体の姿を予想することもできる。偏と旁に代表される「左右」や「上下」(冠、脚)、「内外」(かまえ、たれ、にょう)などの組み立て方を知ることで、手本には載っていない漢字の構成の特徴も推測することができる。このことは、教員としての板書の文字にも活かされることであろう。

V その他

・「硬筆(平仮名・片仮名)の練習+DVD視聴」

参考教材④「10日で「美文字」が書ける本」(青山浩之、講談社、2013)のDVDを視聴し、平仮名と片仮名を美しく書くポイント(硬筆)を確認した。本時の「振り返りコメント」をすべて平仮名で記入し、普段の自分の文字と比較させ、自身の課題を抽出した。

・「指導法」と「評価の方法」

参考教材⑥「DVD書写 筆使いの基礎 4つの視点を意識した上達術」(福井県教育委員会、2017)を視聴して、4つの視点(穂先の方向、運筆速度、筆圧、筆の軸)に基づく指導法と児童生徒作品の評価のポイントを確認し、自分の作品を評価する視点を得た。

・「漢字仮名交じり六文字」

本講義の実技のまとめとして、「漢字仮名交じり六文字」の練習、清書を行った。練習では、これまで学んだ点画の書き方や文字のバランスと調和の取り方を活かして練習した。清書では、半紙3枚以内で書き上げた。30分間の時間制限の中で身に付けた技能を発揮するとともに今後の課題を抽出した。

・「IT時代の漢字指導・漢字テストのあり方」

参考教材⑤「DVD漢字テストのふしぎ」(長野県梓川高等学校放送部制作、2007)を視聴し、GIGAスクール構想が推進される中での、国語科での新しい漢字指導、漢字テストのあり方を考える機会とした。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、意見交流は控えて、レポートによる意見提出となった。インターネットネイティブ世代による提案として、書くことの意義の見直しが多かった。日常における「書くこと」は、IT(キーボード入

力・音声入力)に委ねられ、手書きは個人の「特別な場合」に限られるようになっていくのだろうか。個性としての「手書き」の技能を国語科「書写」はどのように担っていくのだろうか。

4. 本実践の成果と今後の課題

本実践は、実技指導が中心となる「書道・書写」の授業において、新型コロナウイルス感染拡大防止対策として設定された限られた対面実技指導の中で、「書写」授業を展開するための基礎的な技能を獲得させるために学生諸君と試行錯誤しながら進めた授業の記録である。授業内容を総括してみると、単なる手本の敷き写しに終始するとの批判も否めないが、毛筆で「楷書」を書くときの基本事項を短期間で身に付けることを主眼においた実践であり、国語科「書写」(楷書・平仮名・片仮名)を指導する教員としての「知識と技能」習得の最低基準を示したものであることは了解していただけるだろう。

(1)大学生の「振り返り」から

最終回(漢字仮名交じり六文字の練習と清書:課題「美しい山の緑」)の学生の「振り返り」から学生の成果と課題を抄出し、本実践を評価したい。

○成果といえるもの

- ・漢字を大きく書き、平仮名を小さく書くことを意識した。また「止め」「はね」「払い」など授業の最初で習ったことも意識して書いた。
- ・漢字では始筆など、押さえる箇所は押さえ、払いなどの筆圧にも配慮して書いた。平仮名は丸く押さえすぎないようにし、長さ、筆圧に気をつけた。バランスをとるために漢字を大きく、平仮名は少し小さめに書いた。
- ・漢字より平仮名が少し小さくなるように心掛けた。漢字と平仮名を組み合わせるとバランスが難しく、頭の中で半紙を六等分したところを想像しながら書いた。
- ・今回の作品を書く際、文字同士のバランスを考えた。練習で半紙を六分割し、すべての文字をその枠いっぱいを書く漢字が小さく平仮名が大きく見えてしまったので、ある程度大きさの基準は考えながらも文字同士のバランスを意識した。苦手だった始筆、終筆の力加減も意識して今までで一番よく書けた。
- ・今回の清書で意識したことは、漢字の「止め」「はね」「はらい」や終筆・始筆と平仮名特有の曲線やつながりを意識して書くことである。六文字を半紙に収めるのがなかなか大変だったので、「文字のバランス」と「半紙全体の配置のバランス」に気をつけて書いた。
- ・今回は、今まで学習したことの中で、特に「筆を立てること」と、「穂先の位置」を意識するようにした。そして、六文字は平仮名と漢字が入り交じっていたので、「全体のバランス」に注意した。
- ・字数が多く、漢字仮名交じりの六文字は大変難しかった。文字の種類が混じっているからこそ、ここまで学んできた違いや特長を感じながら書くことができた。
- ・今回の清書は他人と比べると下手かもしれないが、一番最初の自分のもの比べるとうまくなっていて満足した。「筆の持ち方」や「穂先の通る位置」、「細く書くこと」を意識するだけでだいぶ変わることができて嬉しかった。この授業を通して字を書くことへのコンプレックスが減ったと思う。

・清書で書いた自分の字を見て、**上達したのを実感**した。「止め」や「はね」、「はらい」、「**筆圧**」や「**筆の向き**」を意識することで一字一字が美しく見えるようになっただけでなく、全体のバランスも考慮して書くことができるようになった。本授業で得た学びや技術を実生活にも生かしていきたいと思う。

○課題となるもの

・漢字と平仮名のバランス、**筆圧のコントロール**、筆を立てることなど、**ポイントは理解しているがなかなか実践できない。知識はあっても技術が足りないことを痛感**した。

・全体的な文字のバランスとして、中心線を揃えたり、漢字と平仮名の大きさを考えたりするように心掛けた。また「い」の上を揃えることや「美」の感覚やバランスにも注意した。しかし、「山」の二画目が折れた後にやや右上がりになることや「の」「緑」のバランスについても**意識したもののうまくいかなかった**。

・今までに習った筆使い、筆圧、漢字と平仮名のバランスを意識して書くことができた。しかし、まだまだ**筆圧のコントロールが不十分**と感ずるので今後の課題として上達したい。

以上から、大学生は「点画の書き方」をはじめとするポイントの数々を自覚して練習、清書をすすめていくことの重要性が意識できたと考える。このポイントを自覚し、意識することは、そのまま児童生徒の実技指導に対して、教員から示しうる具体的な指導のポイントとなる。従来ありがちであった「手本」通りに書こうという無自覚な指導に対抗できる助言のひとつになろう。また、学生は、これらのポイントを自覚し、意識できたからこそ、自分の課題を具体的にみつけることができた。今後、自身の課題克服に向けての修練、技能向上を目指すきっかけにもなると考えられる。

(2)今後の課題

本実践は、本学の「新型コロナウイルス感染症抑止のための基本方針」の感染予防対策に基づき実施した。前半のオンライン授業は、受講者の IT 環境に配慮し、大学のポータルサイトを用いた資料配布型（教科書中心型を含む）授業とした。後半の対面授業は、感染症予防対策（消毒、換気、ソーシャルディスタンスの確保等）を確実に実行するため、受講者を2教室に振り分けて授業者が隣り合う2教室を往来する形態で行った。学生諸君からの意見や要望を踏まえて、今後の課題としては、以下が挙げられる。

○オンライン授業に関わって

・書写の実技指導に資する動画教材の作成。特にオンライン授業時に活用できる様々な角度から書き方を撮影した動画教材の作成が期待されている。

・動画教材の配信方法の検討。大学の IT 設備や受講者の IT 環境に配慮できる動画配信方法を確立する。特に受講者の負担増につながらない方法の探究が急務である。

○対面実技授業に関わって

・授業者が2教室を往来する形態であったので、必然的にタイムラグが生じた。授業時間内に「説明・指示」と「実技」、「動画視聴」などを組み合わせる授業となったが、個人指導の時間を確保するのが難しかった。

・オンラインと対面指導の併用。いつでもモデルとなる動画教材を自分の端末で視聴することができ、不明な点については、授業者に質問したり、実技指導を受けられたりできる環境を作ること。大学内の Wi-Fi の見直しが急務。

教員養成課程における毛筆書写実技の指導 一楷書の技能を向上させる基本ポイント一

・時間確保（練習時間の不足、実技指導時間の不足、授業時間以外の学修時間の確保）
コロナ禍におけるオンライン授業は初めての試みであり、授業者、受講者ともに負担が大きかった。とくに学生にとっては、他科目の授業と課題提出との兼ね合いが大きな負担になっている。また、自宅や下宿等が毛筆書写の練習が可能な環境であるのかを考慮することも重要である。

○今後の展開

・基本的な書き方を学ぶための手本としての古典臨書の活用を提案したい。点画の書き方を学ぶ際に、古典作品の入筆（始筆）や終筆を鑑賞させることで表現の幅が広がると考えられる。単に書写教科書で扱う始筆、送筆、終筆の技法だけに留めず、多様な表現の可能性に気づくことができると考えるからである。これについては稿を改めたい。

・これからの書写の授業においては、モデルとなる文字をインプットするという「理論」の部分とモデルとなる「技能」の部分のバランスよく取り上げていくことが求められる。その一端として、「手本を見ないで書く」ということを提案したい。手本を見ながら書くということは、その手本の字に縛られるということでもあるが、手本がない場合、これまでに学んだポイントを頭の中にイメージして書くことを余儀なくされる。それぞれの文字の筆画や書き方をもう一度頭の中に想起するなど、既習の知識や技能を総括することでポイントが再整理されるのである。「実生活に生きる書写の力」といわれるが、実生活の中では手本が示されている訳ではないので、文字がどのように構成されると美しくなるのかという文字骨格の理論を学ぶことが大切である。モデルとなる文字をインプットするという理論の部分（ものの見方：書体の変遷などの文字文化）とモデルとなる技術の部分（具体的にどのように書くかという「技能」）をバランスよく取り上げていくことが重要である。

註

*1 富山敦史「どうすれば毛筆で上手く文字が書けるのか」、『常葉大学教育学部紀要』、第38号、2017、pp.447-461

参考文献

- ①「中学校学習指導要領国語編解説」、文部科学省、東洋館出版社、2018
- ②「小学校学習指導要領国語編解説」、文部科学省、東洋館出版社、2018
- ③「書字に関する調査をもとにした国語科書写における用筆についての一考察(2)-」、衣川彰人、愛知教育大学研究報告・人文・社会科学編 68、35-48、2019
- ④「書字に関する調査をもとにした国語科書写における用筆についての一考察(1)-始筆の傾向と用筆との関連性を中心として」、衣川彰人、愛知教育大学研究報告・人文・社会科学編 67(1)、33-46、2018

謝辞

本実践で、書写の「知識と技能」の習得に向けての建設的な意見・要望を多数出してくださった2020年度前期「書道・書写A」の受講者の皆さんに感謝申し上げます。